

茶道と私



おおばやし たけお
大林 剛郎

大林組会長
経団連外交委員長

1978年から1980年まで、米国カリフォルニア州のスタンフォード大学大学院に留学していた。その時、いかに自分が自国の文化について知らないかということに気付かされた。当時、現地で知り合った留学生は、自国の歴史や文化を熟知しているだけでなく、それぞれの文化を誇りに思い、それを他国の人にも知ってもらおうとする姿勢を持っていた。振り返ってみると、歴史はともかく、われわれ日本人は日本の文化について学校教育などを通じてあまり学んでこなかったように思う。

帰国してからその経験を父に話すと、ぜひ茶道を学んだら良いと言う。楽しい仲間と日本を代表する文化を学びながら、稽古を通じて新しい世界が広がるというわけだ。早速、お付き合いがあった現在の裏千家の家に先生を紹介してもらい、親しい経営者仲間数人に声をかけて「椿会」というお茶の稽古の会を始めた。今からちょうど30年前のことだ。実際に茶道の世界に入ると、お茶以外にも書や香道、華道、陶芸、漆、鋳物、懐石作法など日本の伝統的なマナーはもろろん、私の生業にも関係が深い日本建築のエッセンスを学ぶこともできる。以来少しずつ会員が増え、今では30代から70代の様々な職業の仲間が月3回の稽古を楽しんでいる。時々茶事や茶会を催すのも、毎回違うテーマごとに異なる道具組みを考えることになり、良い頭の体操になる。

私が最初に師事した櫻井宗梅先生は、三井呉服店

(後の三越)の経営改革を行ったことでも知られる明治・大正期の大茶人高橋箒庵(高橋義雄)のご息女で、素晴らしい茶室での稽古に加え、立派なお道具を使わせていただき、大変勉強になった。残念ながら10年ほど前に亡くなられたが、教え方に緩急があつて、稽古の時は非常に厳しいけれど、終わると「稽古で覚えたことは稽古場を出たらすぐ忘れること。家で復習とかしてもあなた方はどうせ間違つて覚えるだけ。その代わり何度も稽古に来てね」といつも優しくおっしゃってくれたのが懐かしい。

また、茶道を始めてから、仕事やゴルフなどで知り合うのとは違う新しい友人に出会えたこともうれしい。幸いほとんどの「椿会」仲間が脱落せずに稽古を続けている。茶道は、季節や場所、お客さまが変わることで、常に新しい発見がある。きっと、まだまだ新しい発見があるはずだと、毎回楽しく稽古をしている。

